
ほおずき、ぱん

真澄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ほおずき、ぱん

【Nコード】

N6083T

【作者名】

真澄

【あらすじ】

15歳の「みつ」には最近気になる相手ができた。父親の古い知り合いだという居候。憎まれ口ばかり叩いてしまっけれど、頬が赤くなるのは止められない。けれどみつは知らなかった。その人の裏の稼業を。その人が守ってきた秘密を。

江戸を舞台にした物語です。時代考証が完全ではないのはご容赦を。

完結済の「サムライ・ラヴァー」という作品と同じ世界の話です。
独立した作品にしたつもりですが、書いた順番と同じく「サムライ」を先にお読みいただいたほうが、もしかしたら読みやすいかもしれません。

だって初めての気持ちだから

「おまちとおさまー!」

「おっ、おみっちゃん熱い汁物も運べるようになったのか」

昼餉の客で賑わう食事処「たけや」。常連客の軽口にも、看板娘の「みつ」は口を尖らせた。

「もう、おじさんたらいつもそれなんだから」

みつの母親が亡くなり、父親の竹次が店先にみつを置くようになってのは、みつがまだ3歳のころ。はじめは「泣かないで大人しくしていること」がみつの仕事だったが、次第に注文聞きや片づけ、お運びを任されるようになり、いまや立派に店を回している。

しかし初めて料理のお運びをしだした頃は、そろそろと歩くみつに、客のほうでハラハラして見ていたものだ。火傷でもしたら大変、と、熱い汁物はみつに持たせないことが当時の常連客の暗黙の了解だった。かけそばを注文したものは「おみっちゃんに任せてたらそばが伸びちまわあ」と、自ら受け取りに席を立つのだ。

「なあに、おみっちゃんも立派な看板娘になったもんだと思うてよう。なにしろ俺が育てたようなもんだからさ」

みつは苦笑する。この近所には「俺が育てたような」自称父親代わりがゾロゾロいるのだ。

おっ母さん、あたしにはおっ母さんはいないけど、お父つつあんなんだかたくさんいるわ。だから心配しないでね。

「姉ちゃんこつち井二つだ」

「はあい、ただいま！」

せつかちな江戸の町人たちは、昼飯に時間などかけない。サツとかきこみサツと出て行く。だからいわゆる店の回転が早い。無口な父親が黙々と料理をし、みつが手際よく客をさばいていく。今日もたけやは盛況だった。

（やっぱりうちのお父つつあんの料理の腕は最高なんだわ）

たけやがあるのは表通りから少し引つ込んだところ。にもかかわらず、客足は途絶えない。父親の竹次の料理はみつの自慢だった。

けれどみつは知らない。たけやを訪れる客の目当てが、竹次の味ばかりではないことを。

||
||
||
||
||

昼時の混雑が一段落ついた頃、侍がのれんをくぐった。

「いらっしやいまし」

初めて見る客だった。狭い店内をキョロキョロと落ち着きなく見回している。

「何にしましょう」

みつが注文を取りに行くと、男が耳を貸すよう手招きをした。

「あー…八のやつに聞いたのだが、この店には裏のまかない品があるというのはいまことか」

「……少々お待ちを」

みつは厨房に入り、竹次に客の注文を伝えた。

「お父つつあん、また来たわ。八つつあんて人の紹介だっというお侍」

竹次は手を止めずに返す。

「何だつて？」

「裏のまかない品があるというのはまことか、ですって」

すると竹次は包丁を置き、前掛けで手を拭くと、小さな紙片に何かを書き付けた。

「今日は食材の用意がねえから、こいつをお渡ししろ」

こういうやり取りは今に始まったことではない。時々やって来るのだ。「八に聞いた」と言つて裏の品を求める客が。そのたびに竹次は紙片を渡す。一度ちらりと中が見えたことがあるのだが、そこには日時が書かれていた。その日に再訪しろ、ということらしい。

侍にそつと紙片を渡す。他の客に気づかれないよう配慮しろと竹次に言われている。紙片を見た客は大抵、まずがっかりしたような顔をする。そのあと別の品を食べて帰る者もいるし、何も食べずに帰る者もいる。今日の客は後者だった。

「ではまた参ると主人に伝えよ」

去つて行く侍の背中を見送りながら、「何さ、けち！」と胸の内で

舌を出す。

（突然来ても食べられないって、八って人もそこまで教えてあげりやいいのに）

けれどみつは気づいていない。常連客に八なんて男はいないってこと。客が“裏の品”とやらを食べている姿を見たことがないってことも。

みつは知らない。この店を訪れる客の中に、竹次の味以外を目的とする者がいることを。そして“八に聞いた裏のまかない品”が、それを手にするための合い言葉だということ。

みつは知らない。けれどみつの毎日は小気味よく明け暮れていく。みつはこの店で過ごす毎日が気に入っていた。

＝
＝
＝
＝
＝

今日もいつものように忙しい一日が始まる。店の掃除を終えてひと息ついたみつに、竹次が仕込みの手を止めずに言った。

「おう、みつ。いい加減あいつを起こしてきな」

「ええーっ」

反論するも、聞く耳は持たれない。みつは不承不承、店を出て裏手の自宅に戻った。ドスドスと二階に上る。

「ちょっと、浪人さん！」

「…その呼び名はやめてくれと言っただろうが」

忙しいながらも平和な毎日が変わったのは、十日ほど前のこと。父娘二人暮らしだったこの家に、居候が住みついたのだ。

「さっさと起きたらどうですか、この居候殿！」

「その呼び方もなあ…そりやまあ居候には違いねえが…」

ブツブツ言いながらのっそりと起き上がり、大あくびをする。ああもう、伸びたヒゲが汚らしいっただら！

「お店開ける前に朝ご飯食べちゃってよ。もう朝でもないっての！」

「おみつよお」

「何さ！」

「年頃の娘が男の寝てる所にズカズカ入って来るもんじゃねえぜ？」

「……っ」

カーッと赤くなる。それをごまかすように、みつはピシヤリと言った。

「男？ どこにいるのさ。おじさんなら見えるけど」

男は心底傷ついた顔で再び布団に倒れ込む。

「ひでえ…そりゃひでえよ、おみっちゃん…」

「ちゃんと布団あげて出て来てよ！」

ドストスと階段を降り、外へ出てピシヤリと戸をしめる。みつは空を仰いでふう、とため息をついた。

「ああもう、なんだってんだろう…」

最近みつを悩ませているのはあの男の存在…ではなく、彼と対峙すると何故だかケンカ腰になってしまう自分。

だいたいお父つつあんが悪い。古い知り合いだかなんだか知らないけど、あたしはもう15になるっていうのにあんな人住まわせるなんて。小さな頃に遊んでもらったことがあるというけれど、そんなの覚えちゃいない。年頃の娘が心配じゃないのかってんだ。

（…年頃の娘、だって）

たけやの常連客はいつまでもみつを子ども扱いする者ばかり。いっぱしの娘扱いをされ、少しだけ頼のゆるむみつだった。

「起こしてきました。じきに降りてくるわ」

店に戻り、竹次に報告するが、返事はない。父親の口数が少ないのはいつものこと。けれどちゃんと聞いてくれているのは知っているから、みつも気にせず一方的に話し続ける。

「ねえ、お父つつあん。何度も言うようだけど、年頃の娘のいる家になんだってあんな人住まわせるのよ」

すると竹次はちらりと顔を上げ、

「娘？ そんなもんどこにいる。洩垂れなら見えるがな」

「は、ハナタレ!? 15の娘つかまえてハナタレ!?」

「お前のハナが垂れてようが垂れてまいが関係ねえ、相手になんぞされねえから心配すんな。第一あれは年増好みだ」

「年増好み…」

オウム返しにつぶやいたみつの頭に、ぽすりと大きな手が置かれた。

「こら。勝手にひとの性癖を決めるな」

「やっと起きてきたか。とつとと食っちまいな」

竹次が差し出した丼飯に手を合わせ、かきこみながらみつに声をかける。

「おみっちゃん、俺は年増よりもおみっちゃんぐらいのほうグツと来るからさあ。お茶淹れてくんねえかな」

「そんなの、こっちがお断りだよ!」

ちぐはぐな返事を返し、ドタドタと厨房へ入って行くみつをポカッと見送る。

「親父、お前さんの娘は何をぷりぷりしてんだ？」

「俺あお前にそいつを聞こうと思ってたんだがね」

「……手なんざ出してねえよ？」

「当たり前だ。出してたら今頃お前の命はねえ」

「包丁片手に言う台詞じゃねえや！ まったく…父親がわからねえもんをどうして俺がわかるんだ」

「年頃の娘の扱いはお前のほうが専門だろうよ」

「さあて、こちらら年増好みでござんすからねえ」

カン！

湯飲み茶碗が叩きつけられるように置かれる。びくりと顔を上げると、真っ赤な顔をしたみつが仁王立ちをしていた。

「おお…ありがとな」

「今度からはどうぞお好みの年増に淹れてもらってくださいっ」

さすがに見かねた竹次が茶碗に当たるなと小言を言おうとして

ハア…。

目の前の浪人の、なんだか楽しげに笑んでいる顔に、ため息をこぼすばかりなのだった。

〓 〓 〓 〓 〓

店の中にいるのがいたたまれなくて、きれいに掃き終えたはずの店先でみつはほうきを握る。

（あたしったらまたキャンキャン騒いでさ…そんなだからいつまで経ってもハナタレ扱いなんだわ）

ぼんやりと地面を見ていると、ぽん、と頭に大きな手。

「おう、お茶ごちそうさん」

出かけていく背中に慌てて、

「……あ、行ってらっしゃい、新さん」

声をかければひらひらと手を振ってくれる。よかった、聞こえたんだ。

「もう…頭なでたりとかしないでほしいよ」

小さくなる背中にぼつりとつぶやく。このもやもやの原因を、みつは知らない。名前をつければ簡単なことなのだけど。

なでられた頭が熱いのも、気持ちが上がり下がりたり忙しいのも、みんな理由は同じだってことをみつは知らない。

だって、初めての気持ちだったから。

その判断が甘くとも

みつに見送られ、男 新之助は、ある場所を目指し歩いていた。
ゆるんでいた頬を引き締める。

人目につかない場所で、落ち着きなく佇んでいる侍を見つけ、声をかけた。

「八の紹介つてのはお前様かい？」

「お、おぬしは？」

「たけやの出前さ。裏のまかない品を届けに来た」

「信用できるのだろうか？」

「そいつあ信じてもらうしかないが…人に知られたくないのはお互い様だ。少なくとも口の堅さは安心してくれ」

しからば、と意を決したように侍は口を開いた。

「女をひとり探してもらいたい」

「女、を？」

「三日ほど前に姿を消した」

「ひととおりの探索はされたんですか」

「内々にはしたが見つからぬ。表には出せぬ者ゆえ、届け出るわけにもまいらん」

「なるほど…」

つまりは囲い者、妻には知られたくない女なのだろう。新之助は袖の中で腕を組んだ。

「…ひとつ確認しますが、その者が自らの意志で身を隠しているという可能性は？」

「ない」

「ほう？」

「あやつは、儂の目の前で姿を消したのじゃ」

「目の前で？」

侍は、うむ、と頷くと、そのときを思い出すかのように目を細めた。

「女の家を訪ねた日のことじゃ。酒のお代わりを持ってくると言っ

て立ち上がった女が、敷居でつまずいた。アツという声がして振り返ると　もうそこには誰もおらなんだ」

「……神隠し、というわけですか」

「神隠しに遭ったものを何人も連れ戻した者がいる、と聞いてたけやに行つたのだ。おぬし、確かに探し出せるのであろうな」

「何人かは確かに連れ戻しましたがね」

新之助は懷から二枚の紙を取り出した。一枚を侍に示し、読み上げる。

「お代は成功報酬。五日で見つからなければお代は不要だし、探索も打ち切る。その他諸々ご納得いただけたならこちらにお名前を。こちらの紙には、お探しする方の人相風体をできるだけ詳しく記してください」

ときばきと慣れた様子に圧倒されながらも、侍が紙を受け取る。ああそうだ、と新之助は付け足した。

「私のことは他言無用に願いますよ。それが条件です」

＝
＝
＝
＝
＝

そして夜。

客足の途絶えた夜更けのたけやに、新之助の姿があった。

「それで？」

首尾を問う竹次に新之助が応じる。

「無事解決。あちらに着くなりすぐに見つかったよ。いつもの通り爺さんが保護してくれてた」

「本人は？」

「…かなり取り乱していた。無理もねえがな、忘れたがつてるようだったから、あちらのことをペラペラと言いつらす心配はなさそうだ」

「そうか」

「それよりこっちは？ 変わりなかったか？」

何も、と言いかけて、竹次は口に運びかけた酒を止める。

「そっいや、おみつが」

「何かあったのか！」

「お前が帰って来ねえって心配してたぞ。すっかり大人しくなっちゃまって。いやおかげさんで今晚は静かに過ごせた、ありがてえ」

ちえ、と困ったような顔をして、新之助は酒をあおった。

明日の朝は、いつも以上に手厳しく起こされるのだろうか。いや、でも おかしなものだ。まだ数日しかこの家で過ごしていないというのに、みつの説教がなければ一日が始まらないような気さえるのだから。

＝ ＝ ＝ ＝

翌朝。いつものように店の掃除を終え、ひと息ついたみつに、竹次が声をかけた。

「おう、いい加減あいつを起こしてきな」

「新さん帰って来てるの!？」

「二階で寝てたろうが。気がつかなかったか」

知らない!とみつは怒りにまかせてドスドスと二階へ上る。その足音は、新之助の二日酔いの頭にも響いていた。そら来た。

「ちよつと浪人さん!」

「…だからその呼び方は…」

「うわ酒くさい！　ひとをさんざ心配させといてどついつ料簡よ」

「へえ、心配してくれてたのか。そいつあ光荣だね」

ごろりと寝そべったまま肘をつき、みつを見上げる。

「心配なんかしてない！」

言い放って階段を降りて行くみつの姿が愉快でならない。一方のみつは家の外に出ると、さらにもうひと言。

「心配なんて、誰がするかってんだ」

するとそこへ、

「これ、その娘」

突然呼びかけられ、飛び上がる。

「はい！　いらっしやいまし。お店でしたらもう少しで準備が…」

振り返った先にいたのは侍。と、その後ろには駕籠。ちょっとした身分の人物が乗っていて、この侍はきつと使いの者だということは見えてとれた。しかしたけやは、そんな人が来るような店ではない。案の定、侍はみつに向かってひらひらと手を振った。

「店に用はない。この家に浪人崩れの男はおるか」

「え…」

そんなの一人しかいない。けど。みつの目は、駕籠から降りてきた女性に釘付けになった。返事をしないみつに、侍が苛立ちを見せる。

「なぜ答えぬ！」

「これ、大きな声を出すでない」

女性の声に、振り返った侍が「奥方様」と膝をつく。

「あ…あの、新さんなら二階に」

「そうか。ならば上がらせてもらつぞ。案内は不要じゃ。そなたも下がっておれ」

ははッと控える侍の声を聞きながら、女性の背中をぼんやりと見送る。その姿は、15のみつには逆立ちしたって届かない艶にあふれていて。「立てば芍薬」の見本のような 階段を上っていく姿は差し詰め百合の花か。新さんにあんな知り合いがいたなんて。

凝視するみつをどう受け取ったのか、侍がみつを諭してきた。

「これ娘、あの方はやんごとなきご身分の御方ぞ。詮索するでない」

カチン。

「…その浪人、今起こしてきたところなんですけど、狭い部屋にまだ布団も敷きっぱなしで。あんなきれいな方が足を踏み入れて大丈夫でしょうか…私のような子どもですら、不用意に部屋に入ると何をされるかわからないと注意されているものですから、心配になりました」

もつともらしく眉根を寄せながら、侍に小声で告げてやった。「な、なんと…！」とオロオロと二階の様子を伺い始める姿を尻目に、くるりと背中を向け、べ、と舌を出す。

冗談じゃない。やんごとなき方だかなんだか知らないけど、勝手にひとん家に上がったって何様だ。だいたい新さんも新さんよ。女の

人に会うなら外でやれってんだ。

（新さんの好みの女の人って、あんな感じがしら……）

ああ、イライラするったら！

＝＝＝＝＝＝

先ほどとは打って変わって楚々と階段を上ってくる足音に、新之助は「おや？」と二日酔いの頭を持ち上げた。白粉の匂いがする。

「……どちらさんで？」

身を起こして対峙する。姿を見せたのは、この狭くむさ苦しい部屋には似つかわしくない美女。しっとりとした色香を放っている。にこりと婉然と微笑んだ口元、ちらりと見えた歯が黒いことからどうやら人妻のようだ。しかし全体のやわらかい雰囲気の中で目だけが笑ってない様子は、新之助に緊張感を持たせた。

「注文じゃ。そなたに頼みがあつて来た」

「……この浪人に何をお頼みなさるってんです？」

「たけや、とやらを通すのも面倒だな。実際の“仕事”はそなたがしているのであろう？」

仕事の注文はたけやで竹次が受ける。実際の仕事は新之助がする。それは事実だ。しかし新之助の存在は、実際に仕事を依頼した者しか知らないはず。その“力”が悪用されるのを防ぐため、直接接触されないよう竹次が緩衝材となってきたのだ。

「何をご存じか知りませんがね」

「しらばつくれずともよい。そなたが隠したがっていることどもの大体は知っておる」

用心はしながらも、しらを切り通すのは難しそうだと判断する。

「耳敏くていらっしゃるってわけですか」

新之助の反応が満足だったのか、女は、ほ、と笑ってみせた。

「そなた、人さがしを生業としているそうなの」

新之助の沈黙を諾と受け取り、女は続ける。

「探し物が得意な者は、隠し物も得意であろうな？」

「さてね」

「そなたに人を隠してもらいたい」

新之助は、じ、と女を観察する。女の表情は変わらない。微笑んだままだ。

「こないだもそんな注文をしてきたのがいましてね。断ったばかりですよ」

「ほう？ 理由を聞きたいのう」

「…美人の頼みは断れねえやな。他言無用に願いますよ？」

負けず劣らずの食えない笑顔で、新之助もまた、表面上は和やかに対峙する。

「俺ができるのは神隠しに遭った人を探し出すことだ。人を神隠しに遭わせる力があるわけじゃない」

「その手には乗らぬ」

「…と言つと？」

「そなた、神隠しに遭った者が集まる場へ迎えに行き、連れ戻して

くるそうだな。つまり自らの意志で行き来できるということ。ならば人を連れて行くことも造作ないはずじゃ」

さすがに眉をひそめる。この女、どこまで知っている？ 新之助が持つ力を。竹次が隠し、守ってきた、その特殊な能力を。

「先日注文してきた男というのは、自分の妻を消せと言ってきたのであろう?」

「……!」

「その妻は私じゃ」

なるほど、それでこの女の情報網に合点が行く。夫のほうの従者に密告者でもいるのだろう。その行動は筒抜けというわけだ。

「…つまりアンタは夫を消せって言いに来たわけか。犬も食わねえ夫婦喧嘩にひとを巻き込もうってのはいかなもんですかね」

「さ、夫婦喧嘩と呼ぶのかどうか…しかし私が消してほしいものはあの男ではない」

「では?」

「私じゃ。私をここから消せ」

「なんだって!？」

ほほ、と口に手をあて、女は愉快げに笑う。

「そなたは断れまいよ。おおかた犯罪まがいの注文を断ったことで、あの男からの口封じを恐れてここで用心棒をしているのであろう?」

「ほんとに…どこまで耳敏い…」

「下で案内をしてくれたあのかわいいお嬢ちゃんなんぞ、年頃だから心配であらうの?」

……断れば、みつに危害を加えるというわけか。

「しょうがねえな。さつきも言っただろう? 俺ア美人の頼みは断れなんだ。詳しく聞かせてくんない」

この女の言う通り、新之助がここで居候を始めたのは竹次とみつを守るためだ。人さがしが商売のはずの新之助のもとに、「人を隠せ」と依頼してきた男。新之助は当然断ったが、男の背後にはカタギではない世界が見え隠れした。口封じや報復の可能性が無いとは言えない。目の前のこの女は、さらに上手に行くようだ。いやしかしうまくすればこの件、まとめてカタを付けられるかもしれない。

それは甘い判断だったかもしれない。けれどたけやの父娘をこれ以

上危険にさらすことは、新之助にはもつとも避けたいことであった。

きみのところへ

新之助が子どもの頃に通っていた道場で、当時子どもたちに剣術を指導していたのが竹次だった。

新之助が8歳のときのこと。その日、他の生徒たちは皆帰宅したあとで、たまたま道場には新之助と竹次の二人きりだった。

「先生、お願いします!」

「お前もしぶといな。じゃあこれで最後だぞ」

「はい!」

打っても打っても何度となく立ち向かってくる。そんな新之助の根性が気に入ったのが半分、幼さゆえの無鉄砲をやりこめたい気持ち半分。竹次は最後のひと太刀をいささか強めに打った。

交わしきれず吹き飛ばされた新之助が、倒れる寸前に後ろ手に手を引っかき、

(受け身をもつ一度指導しなきゃならねえな)

そう竹次が思った瞬間。

「な……！？」

新之助の体が、地面にスッと消えて行った。

「こいつぁ、一体……」

呆然とその場に固まる。数秒、数分経った頃だろうか。

「先生……」

後ろから呼びかけられ、ギョツとして振り向くと、

「新坊……」

新之助が立っていた。

「お前、一体何をしたんだ？　いま何があった」

「先生ごめんなさい……」

親にも言ったことがない。誰にも言えず今までずっと隠してきたのだと、新之助は泣きながら話し始めた。

いつからかわからない。

手をかざすと、壁に床に穴が開き、見知らぬ場所に落ちてしまうようになった。自分の意志で開けたことはない。転んだときや高い所から落ちたとき、今のようにとっさに受け身を取った瞬間に、開く。

「どこに…その穴をくぐってどこに行くって?」

「わかりません。怖くて、いつもすぐに戻ってくるんです。帰りたいて思ってた穴を開けると、ちゃんと帰って来られるんですけど、いつも、今度こそ帰れなかったらどうしようって怖くて怖くて」

泣きじゃくり出した新之助を抱きしめ、なだめるように背中を叩く。竹次のその手も震えていた。

「その場所ってのは…一体どんなところだ。地獄か?」

ふるふると首をふる。

「人が住んでおります。顔立ちも言葉も文字も、私たちと変わりありません。けれど身なりがまったく違います。建物も、町並みも」

「俺はてつきりお前が神隠しにでも遭ったものかと思ったが…そいつは神隠しに遭った者が行く先、ってわけか。いや、しかし…」

つばやきは、最後はひとりごとになる。

「先生、私はどうすればよいのでしょうか？」

「俺にもよくわからねえが…手、だな？ 手をつくると穴が開いちまうんだな？」

泣きながら頷く。竹次は腰をかがめ、新之助と目線を合わせて言い聞かせた。

「なら俺が受け身を教えてやる。その力は今後一切封印することだ。これからは、どうすつ転んでも決して手をつくんじゃねえぞ、いいな？」

はい、と涙声で新之助が応じ、この日の出来事は二人だけの秘密となった。

二人はまだ知らなかった。その穴の行く先の正体を。それが、時空を超えた未来の日本だということ。

〓 〓 〓 〓 〓

時のひずみ、というものがある。

それは何かの弾みで生まれ、また消えてゆく。ひずみにすっかり落ちてしまうと、その場から忽然と姿が消え、「神隠しに遭った」などと言われることになる。

一方で、自らの意志でひずみを作り出せる能力者というものもいて
新之助がそれだった。もちろん自覚はない。偶発的に起きる現象だと思っていた。ひずみをくぐった先がどこなのかわからない。まさか、そのひずみが時を超えるものだなんて、到底思いもしなかった。

ただ怖くて、誰にも言えなくて。だから竹次がひとつの策を示してくれたことは、それだけで光明だった。

それからの新之助は、竹次の言いつけを守り、つまずいても転んでも決して手を突かなかった。奇妙な現象はパツタリ止んだ。その後、竹次が女房の実家の料理屋を継ぐために道場を辞めていき、新之助の中でその記憶はどんどん薄れていった。

まるで、あんな出来事などなかったかのように。

「……………」

「新……！ 頼む、助けてくれ」

「先生！」

竹次が道場を辞めてから5年が経っていた。久しぶりに会ったその姿は、髪を振り乱し、汗だくで。

「先生、どうされたんですか」

「みつが……娘が、神隠しにあった」

「なんですって……!？」

2年前の竹次の女房の野辺送りで見たのが最後だが、あるとき三つだと言っていたから、今は五つになるはずだった。

「頼む……お前にしか頼れねえ。お前のあの力を貸してくれ。封印しろと言ったのは俺なのに、すまねえが、だが、みつを……あいつまでいなくなっちまったら俺あ……」

こんなに取り乱した竹次を見るのは初めてだった。是非もない。もちろん協力を惜しむつもりはなかったが。

「先生、もちろん私も一緒に探します。けれどあの力を、とは、どういうことですか」

「単純に迷子になったってわけじゃねえ、みつは俺が見てる目の前でスツと姿を消したんだ。いつか新坊が道場で見せたのと同じだったんだよ。お前は戻って来れたらう？ だからみつを、連れ戻してくれ。お前しかいねえんだ」

膝をつき、両手をあわせて拝むようにされる。かつての師匠を見下ろすわけには行かず、新之助も慌てて膝をついた。

「先生、あの現象はあれ以来一度も起きていません。もとより自分の意志で起こしたことなどないのです」

承知の上だ、となおも頭を下げ続ける竹次の姿に、ともかくやれるだけのことはやらねばと、新之助は立ち上がった。人気のないのを確かめ、手近な壁に向かう。

…どうすればいいのだろう。あの奇妙な現象が起きるのはいつも、身を守るうと咄嗟に手を突いたときで。勢いよく突けばよいのだろうか。塀の上からでも落ちてみるか。

壁に向かい考え込む新之助の背中に、竹次が声をかけた。

「新坊、こつちから行くのは偶然だったとしても、帰ってくる時は自分の意志だったんだろう？」

ハツとした。そうだ。いつもどうしていた？　ただひたすら帰りたい、帰りたい、と家を念じて夢中で手を突いていた。ではどうすれば？　記憶にうつすら残るあちらを念じてみればよいだろうか。いや、それよりも。

新之助は竹次を振り向いた。

「先生、やってみます」

再び壁に向き合い、両手をかざす。目をつぶり、一心に念じた。

（おみっちゃんのところへ！）

タン！　と壁を突く。その手応えは一瞬で消え、そつと目を開けると、そこには大きな穴が　壁に開いていたわけではない。その手前、空間にぽつかりと、穴が大きく開いていた。

「せ、先生……！」

動けぬまま竹次を呼ぶと、すぐに駆け寄ってきた。

「新、お前を危険な目に遭わせて申し訳ねえが、みつを見つけたら戻ってこなきゃならねえ。一緒に来てくれるか」

は、はい！ と答える声は、少し上擦っていたかもしれない。しかしたただた怖がつっていたあの頃よりも、5年分大人になっていた。今は恐怖よりも、みつを探さねばという気持ちのほうが強いの。緊張はしていたけれども、はぐれないよう互いの腕をつかみ合って、二人はひずみをくぐった。

〓 〓 〓 〓 〓

たどり着いた場所は公園だった。もちろん二人にはそんな呼び名はわからなかったが。

木々があり、椅子があり、地面は見慣れぬ石のようなもので覆われて平らになっているが、植え込みの奥は土が見えている。日が傾き始めたこの時間、公園内を歩く人は多くない。竹次にはそれほどの違和感が感じられなかった。

「みつ！ どこにいった！」

「おみつちゃん！」

広い公園内を二人で探し回る。ときおりすれ違う人がその姿を見るや、ギョツとして小走りに去って行く。さすがに竹次も、何度目かでそれらの視線に気づいた。

いつか新之助が言っていた。こちらの人々は見た目も言葉も我々と同じ。ただ身なりが違つ、と。確かに皆、見慣れない格好をしている。

「先生？」

「いや…」

立ち止まった竹次を新之助がふり返る。そのとき、薄暗くなり始めた公園内の街灯が灯った。その明るさに竹次はギョツとする。今までみつを探すのに夢中だったが、確かにここは江戸とは違つ。一体ここは。

「お前さんたち」

ハッと二人がふり返ると、植え込みの奥から初老の男性が出てきた。

薄汚れた服を重ね着し、髪もヒゲも伸び放題。しかしそんな人は江戸の町にもいる。二人にとっては却って違和感が小さかった。

「ひょっとして女の子を探しているのか」

「みつを…娘を知っているのか!？」

血相を変えて詰め寄る竹次に、男性は、みつ、とつぶやいた。

「たけや、みつ、五歳。迷子札にはそうあった」

「間違いねえ、うちの娘です!」

「……」

男性は一瞬何かを言いたげな様子を見せたが、ついてきな、と二人に顎をしゃくってみせた。

〓 〓 〓 〓 〓

二人が連れて行かれたのは、公園の片隅。段ボールが並ぶ一角に、男性は案内した。シートに覆われた中を覗くと、薄い布団の上でみつがすやすやと寝息を立てている。

「みつ…!」

駆け寄って胸に抱き上げる。竹次の男泣きに、新之助もまた目を赤くした。

「ありがとうございます。ありがとうございます！」

何度も頭を下げる竹次をおさめ、それよりも、と男性は考える様子を見せた。

「お前さんたちは、江戸から来たんだよな？」

新之助がハツとする。

「何か、何かご存じなんですね！？ 教えてください、ここは一体どこなんですか！」

しかし、それには男性のほうที่驚いた。

「それも知らないで来てるってのか。しかしあんたたちは……いや、このお嬢ちゃんのように江戸から迷い込んで来た奴らは時々見かけるんだよ。だがあんたたちのように、それを迎えに来た奴ってのあ初めてだ。迎えに来たってことはあっちに帰れるってことだろう。」

あんたたちは好き勝手に行き来できるのか？」

そこまで一気に話してから、いや、と男性は新之助の返答を遮る仕草を見せた。

「互いに質問しあってたらキリがねえな。いいだろう、まずは俺の知ってることを話そうじゃないか」

いつの間にそんな

江戸から迷い込んだ奴らを時々見かける。そうとわかるのは、俺もそうやってここに来たからだ。

驚いたかい？ もう何年になるかなあ…何かのはずみで気がついたらここに着いてな。俺の場合は幸い世話をしてくれる人に恵まれて、こうしてその日食って寝るだけの生活ができています。家も定職もねえが、なに、そんなものは江戸でだって無かったさ。

ああ、ここがどこかって話だったな。ここはな、場所は俺たちかもといった所と同じなんだが…時代が違うんだよ。

わからねえか？ つまりな、お江戸の世から見ると、今いるこの場所、数十年、数百年経った未来ってわけさ。

「そいつあ、一体…」

「なに、戸惑って当然だ。俺も状況を受け入れるまでにずいぶんかったもんだよ。…坊主くらいの年だともう少し柔軟かもしれないが」

見ると、竹次がただただあ然としているのとは対照的に、新之助はあごに手をあててじっと考えこんでいた。男性の呼びかけに、顔を上げる。

「いえ、私も驚いてはいますが…ただ、それを聞いていろいろなこ

とに納得がいったのです」

「お前、今の話を納得したってのか！」

「だって先生、ここの人たちは異国人ではありませんし…かといって日本の中にこんな場所があるとは思えないし…他に説明が付きません」

うーん、と考え込む竹次から視線を移し、新之助は男性に尋ねた。

「時代が違うというのは、何年くらいなのでしょう」

「さて…暦が違うから正確にはわからないがね。いま世界でいちばん長寿だという男性が120歳近いんだが、そいつも俺よりずっと年下だよ」

ひやくにじゅう…、そうつぶやく新之助に、今度は男性が尋ねた。
さあ坊主が答える番だぞ、と。

新之助は、自分に起きたことをわかる範囲で説明した。時々偶然こちらに来てしまっていたこと。江戸に帰っていたこと。今回初めて自分の意志でこちらに来たこと。当然、仕組みも理由もわからないということ。

「そんなことがあるもんなんだな…。で、そのお嬢ちゃんを連れて

三人で帰るってわけか」

「はい。あの…あなたも、一緒に行かれますか？」

新之助の申し出に、男性は一瞬目を丸くしたが、すぐに首を振った。

「いや、俺はあちらに戻るつもりはねえ。戻ったところで家もねえ、家族も仕事もねえときちゃ、ここにいるほうがいくらかマシだよ」

「そうですか…」

「それよりもな、坊主に頼みたいことがあんだ」

「頼み、ですか？」

ああ、と頷いてみせ、男性は居住まいを正した。

「俺は江戸へ戻るつもりはない。だがな、すっかり迷い込んでしまった奴らをどうにか戻してやりてえのよ」

「おみっちゃんのような子を、ですか」

「小さな子ならまだ、本人も状況がわからないし、養い親に出会えることもある。本当に哀れなのは大人のほうだよ。発狂せんばかりだ。だからな、坊主のその力でなんとか助けてやっちゃんくれねえか」

頭を下げられ、新之助は顔を上気させた。訳のわからない自分の力がひとの役に立つかもしれない、という事実は、少なからず新之助を興奮させた。13歳という子どもと大人のはざま。若者らしい義侠心で身を乗り出す新之助に、一方で冷静な竹次が口をはさんだ。

「いや、こいつはまだ力を使いこなせているわけじゃねえ。娘を助けてもらっておいて言うのもなんだが、あまり期待はしねえでくんな」

「先生！」

水をさすような言い方が、新之助には理解できなかった。人助けだというのに、なぜ？　しかし竹次は別のことを案じていた。

新之助の持つ特殊な力が人の口の端に上れば、必ず悪用を企む者が現れる。その力でみつを助けてもらっておきながら、今後は封印しろというのが身勝手なのはわかっている。しかし自分たち父娘がきっかけを作ってしまったからこそ、新之助を守る責任があるのだと、竹次は考えていた。

「私はぜひ協力したいです」

「安請け合いはよしておけ」

どちらの気持ちも理解できる。男性はうんうんと頷いてみせた。

「なに、迷子だったって一年にひとりか二人いるかどうかだ。もしまたうっかりこちらに来ちまうようなことがあったときに、俺のところに寄ってくれたらそれでいい。そのときに俺がまた誰かを拾っていたら、一緒に連れて帰ってやってくんない」

「ここに来ればあなたに会えますか」

「そうさな。追い出されさえしなけりやない」

「私は井原新之助と申します。あなたのお名前は？」

「喜八：八、と呼んでくれりやない」

「……………」

それからというものの、洪る竹次を説き伏せ、新之助は時のひずみを作る練習をし始めた。数か月も経たないうちに自在に扱えるようになり、ついに迷子をひとり連れ帰ってきたのを知ったとき、ようやく竹次も諦めをつけた。

賛成はできないが、新之助が本気なのなら仕方がない。ただし約束しろ。決して自分の正体を明かすんじゃない。代わりにたけやが表に立つ。

そうして新之助は頻繁に喜八の元へ通うようになった。はじめは喜八が保護した者を連れ帰るだけだったのが、どこから聞きつけたものか、次第に探索の依頼が舞い込むようになった。

どうせ次男坊で継ぐ家もないからと、新之助はこれを仕事にすることにした。いくら金を取ったほうが後腐れがなかるうという理由もある。

もちろん依頼はそんなにしょっちゅう起きるものではなかったし、探索料も依頼者が無理なく支払える程度の額にしていたから、食い扶持を稼ぐまでには至らない。新之助は、かつて自分も通った道場で師範を手伝うことで生計を立て、その傍ら、密かに神隠しの探索を行っているのだ。

そんな新之助の生活を苦々しく思いながらも、竹次は自分が表に立つことで新之助を守ってきた。

もう師匠でもないから、と、「先生」という呼び名を竹次が断り、三日間悩んだ末に新之助が決めた「親父様」という呼び方が、いつしかただの「親父」に変わり。さらに2人の間に敬語がなくなっても、その関係はずっと続いてきたのだった。

〓 〓 〓 〓 〓

竹次が心配していたことがついに起きたのは、半月ほど前のこと。新之助に対し、人探しではなくその力を使って人を消せ、と依頼し

てきた者がいたというのだ。当然断つたが報復でもされたらことだし、しばらくここで守らせてくれ。新之助のそんな申し出で、居候が始まった。

みつの反応には内心驚いた。あいつもいっぱしに男に頬を染めるような年齢になったのかと思う。しかしそれよりもっと意外だったのは、新之助がそんなみつを見て、まんざらでもないような顔を見せることだ。本当にあいつらはいつの間にもそんな歳になったんだか。

竹次は包丁の手を止めて店先に目をやった。

そのみつは、新之助を起こしに行ったきりなかなか戻らないと思つたら、今度は店先でちらちらと家のほうを覗いて落ち着かないでいる。

「いい加減にしねえか、鬱陶しい。新はどうした？」

ふり返つたみつは、唇をとがらせて、

「新さん、お客様だって」

「…客だあ？」

みつの答えを、竹次は訝しんだ。新之助は自分がここに寝泊まりしていることを明かしていないだろうし、たけやの常連たちは二階の居候の正体を知らない。つまり新之助に客など訪れようはずがないのだ。

「客ってなあ一体誰だ」

「…百合の花」

「ああ？」

「知らない人！ここに浪人はいるかつて、お供の人まで連れてんの」

供を連れた女…？ 新之助の家の者か？ いや、妙齡の女なんぞいないはず。第一名前を言わずに訪ねて来たというのは怪しい。

「誰かれ構わず通すもんじゃねえよ」

「止める間なんてなかったもん！下がっておれ、とか言っちゃつてさ。やんごとないか何か知らないけど何様よ」

身分のある女、か。竹次のなかで不安が頭をもたげる。様子を見に行こうかと厨房を出かけたとき、店の入り口から新之助が顔を覗かせた。

「親父すまねえ、朝飯はいいわ。遅くなっちまったからこのまま道場へ行く」

「お前……」

氣遣わしげな目線を送る竹次に、大丈夫だと同じく目で答え。ついでのようにみつの頭をぽんぽんと叩いて、新之助は出かけて行った。たけやの父娘それぞれの胸に、不安を残して。

あたしはもう決めてるから

道場へ向かう道すがら、新之助の頭の中は先ほどの女のことについてばいだった。やり取りを何度も反芻する。

「さ、聞かせてもらおうか」

「言った通りだ、私をここから消せ　　5日経ったら戻してもらおう」

「都合のいい話だな。そう簡単に行ったり来たりできるって？」

「できるのである？」

「……それで？　あちらでどう過ごすつもりだ。どこまで知ってるのか知らねえが、アンタが身を置くような場所はねえぜ」

眉をしかめて見せた新之助に、女はなおも婉然と笑う。

「うちに珍しいのがいてな。神隠しに遭ったことがあるというのだ」

「……ほう？」

「それも、たどり着いた先で助けられて、三月ほど過ごしたそうでの。こちらに戻るときには涙の別れだったそうだ」

「……」

新之助は再び眉間にしわを寄せる。その光景には覚えがあった。昨年未だったかに連れ帰った若者だ。あちらの人と親しくなっていて、無事に帰れてよかったと涙ながらに見送られていた。珍しいことだったのでよく覚えている。あの男、この女の家に使っていたのか？

「その世話になった人に頼めば、数日くらい置いてくれるだろうと言うのでな」

「するてえと、その男も一緒に行くってことか？」

「人数制限でもあったか？」

「いや……二、三人なら……」

問題は人数などではなく。

渋面を作る新之助に、女はわざとらしく、ああ、と付け足した。

「そなたのことは他言無用だったそうだが。許してやっておくれないか？ あの年頃だ、誘惑に勝てぬこともあるう」

……色か、金か。いずれにせよ何かで釣ったのだらう。忌々しい。

なるほど、夫よりも詳しいのはそこに情報源があったのか。

「で？ 実行は？」

「明日の夜」

明日の夜。きっかり5日行方をくらますことで何をしようというのか。夫を心配させたい？ そんな可愛いもんじゃないな。では手下に搜索願いでも出させて、夫に罪をかぶせるか。いずれにしても、夫のほうにももう一度会わねばなるまい。報復を警戒した時点で素性は調べてある。今日中に打診をしておいたほうがよいか、あるいは動きを探られないよう、女をあちらへやってから動くべきか。

「やーっ！」

「！」

考えに夢中になるあまり、反応が遅れた。目の前に竹刀があり、反射的になぎ払う。我に返ると、生徒が床に転がっていた。そうだ、今は稽古中だ。慌てて抱き起こす。

「すまねえ、ケガはないか？」

少年は頭をさすりながら起き上がり、両手をつく。

「参りました」

「バカ、何言つてんだ。今は俺が悪い。どれ見せてみる」

おでこのたんこぶをそつと撫でる。なんてこつた。気を散らした拳
げ句ケガをさせるなんざ、言語道断じゃないか。

「悪かったな、許してくれ」

後ろめたさで反省しきりの新之助に、そうとは知らない少年はきよ
とんとするばかりだった。

|| || || || ||

「痣にならなけりやいいがなあ」

新之助は少年を家まで送って行くことにした。濡らした手拭いで額
を押さえさせ、少年の荷物は新之助が持つてやる。心配そうに覗き
込む新之助に対し、少年は少し口をとがらせた。

「額にこぶを作ったくらいで先生に送っていただいては、家の者に叱られます」

そう言われると、少し大げさだったかという気になってくる。いやしかし。

「そのこぶはお前が未熟なせいじゃねえ、ってのは、きちんと両親に説明しないと。俺の不注意でケガさせたわけだし。母上もびっくりなさるだろう」

母、と聞いて、少年は何か言いたげな顔をしたが、結局口をつぐんだ。その横顔を見やる。

みつよりも少し年下だろうか。子どもと呼ぶには少し大人びたいや、そうあるうと背伸びをし始める頃、だろう。ちょうどあのときの自分と同じくらいか。

少年の赤い頬を見ながら、新之助はしまっておいた記憶を取り出す。神隠しに遭ったみつを竹次と二人、探しに行ったあのとき。13歳だった。その力を貸してくれという喜八の申し出を、もう少し子どもだったら引き受けなかっただろう。あと少し大人だったとしても。

後悔はしていないが、止めどきを見失ってしまったのは確かだ。助けを求められれば断れない。しかし、他人に言えない仕事をいつま

で続けていけるものか。俺だって所帯くらい持ちてえや。

そんなことを考えながら歩いていると、突然少年の顔がパアッと輝いた。

「叔父上！　今お戻りですか」

「叔父上？」

「はい。私は両親とはなく、叔父と住んでいるのです」

前方を見ると、家の前で若い武士がこちらに会釈をしていた。慌てて返す。少年が駆け寄ると、叔父という男性は額のこぶに目を止め、ニヤリとした。

「どうしたその顔、派手にやったなあ」

「はい。それで井原先生が送ってくださいました」

井原、とつぶやき、じっとこちらを見る。

「お前…新之助か」

名を呼ばれ、あつと声をあげた。

「勘さん！」

少年が二人の顔をキョロキョロと見ながら、

「お二人はお知り合いですか」

「ああ。子どもの時分に道場で一緒だった。久しぶりだな、新」

それは新之助が道場に稽古に通っていたころ、何かと面倒を見てくれていた兄貴分。勘右衛門だった。ちょうど竹次が辞めたところに、勘右衛門もまた、奉行所の仕事についたため道場に来なくなったのを覚えている。

「こりゃあい。新、ちよいとつきあえ。おう、俺は新之助先生と一杯やってくつから、お前はそれでおでこを冷やしてな」

「はい。先生、ありがとうございました」

新之助から荷物を受け取り、一礼して家へ入っていく少年を見送ると、男二人は呑み屋へときびすを返した。

「……………」

「久しぶりだな」

「本当に。…いつの間に子ども作っただんです？」

ハシリ、と頭をはたかれる。

「阿呆。甥っ子だ、甥っ子。ちょっと事情があつてな、うちで暮らしてんだ……そっぴや時々若い先生が教えに来るってあいつが言ってたが、まさかお前だとはね」

「たまに代稽古をやらしてもらってたんだ。普段は雑用係ですよ」

酒が入り、新之助の敬語がほどけてくる。そうかそうかと上機嫌で酒をあおる勘右衛門の手が、そっぴえば、と止まった。

「お前、竹次先生とは最近会ってるか？」

「……店にはよく行きますよ。たまに食いに行ったらどうです？
今やあの界限じゃ人気店だ」

「たけや、か。その店で裏の商売をしてるって噂は？」

「……………！」

核心をつかれたその一瞬の動揺を、勘右衛門は見逃さなかった。

「……お前も関わってんのか」

「……」

どこまで明かしてよいものか。言葉が継げなくなっている新之助に、勘右衛門は苦笑とともに肩を叩いた。

「なに、お上が取り締まろうってわけじゃない。ただ、危ない目に遭わねえかってのが心配なだけだ」

「それは大丈夫です。あの父娘に手出しはさせない」

新之助の即答に、勘右衛門の片眉が上がる。

「つまり手出しされる可能性があるって？」

「っ……」

再び言葉につまる。勘右衛門は新之助の肩においたままの手を、ぽんぽんとはずませた。

「言える範囲でいい、話してみな」

「|||||」

聞き上手の勘右衛門に、すっかり引き出されてしまった。もちろん「時のひずみ」の話は伏せている。ただ人探しを副業にしていって、いま厄介な案件を抱えているのだということだけ。

「ふうん…福田家か。駿河台のだろう？」

「知ってんですか？」

「ああ。なんとなく読めた」

「というと？」

うん、とひとつうなずき、酒で口をしめらせる。

「福田の当主にはつきあいの長い女が外にいる。だがな、あそこは入り婿だ。おいそれと離縁はできねえってわけさ」

「だから妻を神隠しに遭わせろって？」

「ああ。不可抗力で“致し方なく”別れようってんだろ」

しかしわからないのは女のほうだ。

「氣にくわないなら夫を追い出しゃいいものを。何を企んでんだか」

「そういう事情なら、姿を消せば夫は嬉々として“行方知れず”と届けを出すだろうな。それを女がどう利用しようってのか……」

「きな臭えな。なあ新、今からでも手を引いちゃどうだ」

「そついうわけには行かないよ」

なにせあの女は、みつの顔を知っているのだ。

「…まあ、今の話だけじゃあ奉行所は何も手を出せねえが。俺も気になる。それとなく伺っておくよ」

あまり無茶すんじゃねえぞ、という勘右衛門の言葉に送られ、新之助はたけやへ帰って行った。

〓 〓 〓 〓 〓

日が暮れたとはいえ、まだ早い時間だった。たけやに戻り、家へ入

ろうとすると、玄関先でみつが待ち構えていた。壁にもたれかかり、ムツツリと眉をしかめている。

「…おかえりなさい」

「おう…店は？」

「もうお酒の時間」

たけやでは夜になると酒を出す。その時間帯は、みつは店に出ることを許されていない。子どもが酒を扱うな、と竹次に言われ、みつはひと足先に家に戻るのだ。

「そうか。ご苦労さん」

いつものように、ばんばんと頭に置こうとした手を、みつはそっとよけた。

「新さん」

「ん？」

「新さんは、ああいう、百合の花が好きなの？」

「はあ？ 百合？」

なぜ急に花の話が出てくるのか、と問いかけて ああ、今朝の女
のことを気にしているのかと気づく。

「そうだなあ。俺あ百合みたいな気取ったのより、その辺に咲いて
るようなのが好きだな」

「そう…なんだ」

どことなく嬉しそうにつぶやく姿に、つい余計なことを聞いてしま
った。ほろ酔いのせいだ。

「そういうおみっちゃんはどうなんだ。お嫁に行くならどういの
が好きなんだい？」

ばか！と、また真っ赤な顔でふくれるのかと思いきや。返ってきた
のは穏やかな笑顔で。

「あたしはもう決めてるから。お嫁に行く先」

「……へえ？」

それは意外なほどの鈍い衝撃だった。

「いっぱしに、いい人がいるのか」

「そんなんじゃないよ」

ぽーんぽーん、と地面を蹴る足元に視線をやったまま、みつは言う。

「あたしはね、お嫁に行ってから、たけやでお父つつあんの手伝いをさせてくれる人のところへお嫁に行くの。だからお店をやっている人はダメ。だって向こうの店を手伝わなきゃいけないでしょう？」

…ああ、そういうことか。つまり、

「おみつはお父つつあんが好きなんだな」

わかんないけど、と、わざと首を傾げてみせるその頭を、今度こそぽんぽんと叩く。さっき、一瞬どきりとしたのは何だったのだろう。

「そんなら、料理人と夫婦になって、亭主にたけやを継いでもらうのかい？」

しかし、みつはきよとんとする。

「それは…考えもしなかった…。たけやの厨房にお父っつあん以外の人が立ってるなんて、考えたことないもの」

「そつか。じゃあ」

……

「もう、ばか！」

パタパタと家に駆け込んで行くみつの背中を、呆然と見送る。俺は今、なんて言った？

じゃあ、俺は包丁を覚えなくてもいいのかな。

何言ってたんだ、俺。

ふう。

先ほどまでみつが寄りかかっていた壁に、背を預ける。少し、酔いを覚ましてから家に入ろう。

させるもんか

翌朝。

珍しく早起きの新之助に、竹次が仕込みの手を止めた。

「……なんだ珍しい。今日は雨か？」

「いや、ちよつとな」

なんとなく、みつが起こしに来る前に起きようと思ってしまった。
当のみつは、ムスリとした顔で机を拭いていたかと思うと、入れ替
わるように外へ出てしまった。

ちようどいい、と、声を潜めて竹次に告げる。

「今夜は遅くなる。ひよつとすると戻らないかもしれねえ」

竹次は眉をひそめた。

「例の件か？」

「ああ」

手短に事情を説明すると、竹次がますます渋面になる。苦言を聞かされるだろっことを見越し、それを遮るよつに新之助は話題を変えた。

「そついやあ昨日、勘さんに会ったよ」

「勘……勘右衛門か！」

「うん。道場の生徒に甥っ子がいたんだ」

「そつか……あいつも奉行所の仕事が板についた頃だろうな」

「ああ。飄々としてるくせに、目ざというえに耳ざとい。すっかり聞き出されちゃった……それで、な。たけやの裏商売のことも知ってたよ」

竹次が視線を上げる。新之助は続けた。

「あちらのことは伏せておいたが、今回の厄介ごとについては話した。何かあれば力になってくれると思う」

そつか、とつぶやき、黙々と作業を続ける。そして手元を見たまま、

「なあ新。今度のことがカタついたら、もう終いにしちゃあどつだ」

「親父……」

「これでわかつたろう？　ただの人助けの域を超えている」

「わかつてんだ、無茶してるってのは。けど、本当に向こうに迷い込んでしまっている以上、助けてくれと言われてそれを断ることはできねえじゃねえか」

互いに互いの言い分がよくわかる。ほうきを手にしたみつが店へ入ってきて、その話はそこで中断された。

〓 〓 〓 〓 〓

その晩。

約束どおりの場所で、新之助は例の女と対峙していた。後ろには供が一人。たしかに以前、新之助が助けた男だった。気まずそうに目をそらしている。

「迎えに行くのは5日後、だな？」

女は悠然と頷く。ひずみを開けるべく宙に手をかざしかけ、新之助はさらに問った。

「それで　こちらに送り届けた途端に口封じ、なんてのはナシだぜ？」

「なんの、立場の危うさで言ったら私のほうこそ不安だ。迎えに来ずにあちらに置き去りにされないとも限らないからな」

内心、ため息をつく。そうしてやりたいのはやまやまだよ……。

「例のじいさんのところへ送る。迎えに行くのもそこだ。いいな？」

今度は供の男に尋ねる。場所の確認をし、新之助はかざした手に意識を集中させた。

「ハッ」

気合いを入れるとともに、空中に穴が開く。ふう、と息をつき、

「さ、これをくぐればこちらの世界からは影も形も無くせる。じいさんに伝えたいから一旦は俺も一緒に」

「新さん……？」

聞き慣れた声に喉がつまる。

恐る恐る振り向く。

目を見開く。

そこにいたのは、いるはずのない、

「おみつ…お前、どうして、ここに…？」

〓 〓 〓 〓

今日は夕方で店を閉めるから、先に帰らず残ってる。父親にそう言われ、みつは首をかしげた。

夏が近づき、陽が長くなってきた、仕事帰りに一杯寄ってから帰る職人が増える時期だ。書き入れ時と言ったら大げさだけど、酒を出さずに夕方で閉めてしまっただけじゃないの？

それが新之助の不在と関係しているなんて、みつの身を案じてのとだなんて、思いもよらない。

客足が途切れ、のれんをしまふ。店には長つ尻の客が一人残っているだけだった。こういう場合、普通は先に帰らせてくれる。終わるまで待ってるたって、その客以外の片づけはもう済ませた。暗くならないうちに湯屋に行きたいし　しびれを切らし、みつは父親に合図をして一人店を出た。

湯屋、つまり風呂屋に向かっていたところで、声をかけられた。昨

日、新之助のもとを訪ねてきた女の従者だ。

「あ…昨日の」

「おぬしを迎えに行くところだったのだ。新之助、と言ったか。あの男が今奥方様のところにいてな。おぬしに来てほしいと申しとおる」

「新さんが!？」

「うむ、困っておるようじゃ。助けてやってくれぬか」

自覚は無くとも好きな男だ。頼られるのは正直うれしい。が。

「あの、そもそも新さんと、その奥方様とは一体どういう…？」

「詳しいことは言えぬが。奥方様のお困り事を、新之助に解決するよう依頼しておるのだ。今晚その作業をするはずだったのだが、新之助の具合がちと悪くてな」

「具合が？ 大変!」

「うむ、それでおぬしを呼んでくれと」

新之助の具合が悪い。みつの頭はもうそれでいっぱい。ほら、昨夜お酒飲んでたし、今朝もやけに早起きだったし、どうかおかしかっ

たんだ。

「参ります。ちょっと、お待ちください。一度家に帰って父に伝えられますから」

「ああそれには及ばぬ。こちらから使いを出すから、おぬしはここで駕籠に乗れ。できるだけ早く着きたいのだ」

たしかに、今から家に帰っていても時間がかかる。帰りが遅くなつたとして、新之助と一緒に帰れば問題ないだろう。そんなふうにし考えなかった。

連れられていったのは、ある屋敷。男のあとについていくと、部屋の中からボソボソと話し声が聞こえてきた。新さんだ……！

「こちらに送り届けた途端に口封じ、なんてのはナシだぜ？」

口封じ？ 物騒な台詞にそつと部屋を覗く。新之助が、宙に手をかざしていた。何を、しているんだろう。ちらりと見えた横顔は、みつの知らない真剣な顔。少し怖くて、少し素敵で。やがて気合いの声とともに、空間がグニヤリと歪んだ。今、何したの。

「さ、これをくぐればこちらの世界からは影も形も無くせる」

「新さん…？」

思わず呼びかけてしまった。振り返った新之助は驚愕の表情。

「おみつ…お前、どうして、ここに…？」

かすれた声で問われ、困惑する。だって、新さんが呼んでるっていうから。

新之助の問いに答えたのは、女だった。

「一人では心細くてのう。お嬢ちゃんに一緒に来てもらおうと思っ
てな」

「ンだと！？」

「お嬢ちゃんがいれば、そなたも迎えに来るのを忘れまい」

「てめえ…！」

みつには状況がさっぱりわからない。ただ、新之助がひどく怒っていることだけがわかった。

「新さん、ごめんなさい。あたし来ちゃ行けなかった？」

言つと、新之助はみつを振り向き、心配そうな表情をした。怒っているわけではないのかと、少しほっとする。すると女がさらに

「お嬢ちゃんを叱らないでやっておくれ。“新さん”が困っていると聞いて、助けてあげたくて来たのだもの」

「みつに手エ出しやがったらどうなるか、覚悟してのことだろうな？」

「なに、手駒を等しくしたまですよ。あまりにもこちらに不利過ぎたのでな　お嬢ちゃん、すまないが、私の供をしておくれでないか？　女手が足りぬでの」

戸惑うみつを制し、新之助が構える。

「行かせるか！」

しかし、新之助はニヤリと笑む女の唇を見たのを最後に、意識を失った。

「さ、参ろつか」

「新さん！ 新さん、大丈夫？」

部屋にいた男に手を引かれ、ひずみに連れ込まれる間も、みつは必死に新之助に呼びかける。

「大丈夫、気を失っているだけだ。5日後には迎えに来てもらわねばならぬからな」

「迎えに…？」

そこで初めて、みつは自分の置かれている状況を見た。どこかへ行く、と言っていた。だのに部屋の入り口ではなく奥に向かっている。先にあるのは、先ほど新之助の手から生まれた、グニヤリとした空間。何だろう、これ。そして

足元がグラリとして、みつもまた、意識を遠のかせた。

＝
＝
＝
＝
＝

ぱしぱし、と頬に軽い刺激を感じた。

「おい、新。どうした、大丈夫か？」

ぼんやりと目を開けると、竹次がこちらを覗き込んでいた。焦点が

あい、意識が戻る。新之助は飛び起きた　飛び起きようと、した。

「ッつー…！」

後頭部がズキリと痛む。やられた。

「大丈夫か？」

「親父、おみつは？」

「湯屋へ行ったらしいんだが戻らなくなてな。様子を見ようと出てきたら、お前が行き倒れてた…何があった？」

思わず目をとじる。一番避けたかったことを防げなかった。新之助は身を起こし、竹次に向かって手をついた。額を地面にこすりつける。

「申し訳ありません！」

先ほどのことを説明する。しかし竹次は、表情こそ厳しかったが動揺はしていなかった。

「その女の言い分に沿うと、少なくともお前が迎えに行くまでみつ

は無事だろう」

「そんな、無事だったって怖い思いして」

「なに、あいつは肝っ玉が据わっているから大丈夫さ」

それで、どうするつもりだ？ 竹次に聞かれ、新之助は顎に手を当てた。

本当ならすぐにでも迎えに行つてやりたい。しかし、居場所を探している間に約束の5日になってしまつては意味がない。あの女の企みを成就させるなんぞ、こうなつた以上、絶対に許さない。

「親父、俺は今から女の亭主に会つてくる。女の企みをぶつ潰してやつて、それからおみつを迎えに行く」

言うが早い、もう走り出している。

「おいっ」

竹次の制止など耳に入らない。夜の町を走りに走り抜け、目的の屋敷にたどり着く。両手をひざにつき、肩で息をしていると、その目に男の足が見えた。乱れた息のまま顔をあげ ニヤリとする。

「やあ、お目にかかれて光栄ですよ」

「貴様、何しに来た」

たまたま出先から戻ってきたこの屋敷の主人、つまり、あの女の亭主だつた。

胸が、痛い

「あいつが神隠しに遭わせると？」

男 福田左門の屋敷に招じ入れられ、新之助は事の次第を話した。

「ああ、あんたが以前俺に依頼したようにね。奥方様は自分を消せと言ってきたんですよ。ただし5日の期限つきだが」

じつと考え込む素振りを見せた男に、新之助は続ける。

「亭主の意を汲んで自ら姿を消そうってんですかね」

「そのような殊勝な女に見えるか？」

「いや、ちらりとも。肩をすくめてみせると、男は手を叩き女中を呼びつけた。」

「りくはおるか」

「奥方様は本日、ご実家においでになりました。まだお戻りではありません。ひよっとしてお泊まりであるうかと、先ほど問い合わせに行かせたところでございます」

りく、というのが女の名前なのだろう。すると、廊下をバタバタと走る音が近づいてきた。

「旦那様、失礼いたします、旦那様！」

新之助からすると背中側にあたる廊下に、男が膝をついたのがわかった。

「松田か。何事じゃ」

「は、ただいま奥方様のご実家に参ったのでございますが、本日はおいでになっていないとの由」

「ほう」

「利吉が供をしておったのですが、奴の行方も知れません。何事かに巻き込まれたのではないかと……役人を呼びに参るお許しをくださりませ」

新之助の目に、左門がニヤリと口の端を上げたのが見えた。

「いや待て。今夜ひと晩は様子を見よう。届けを出すのは明日でよい」

「そのような悠長を　　む！　おぬし…！」

松田と呼ばれた男が新之助に気づき、声を挙げる。振り向くと、それは先ほどみつを連れて来た男だった。おそらく、新之助を背後から襲ったのも。飛びかかりたくなるのを、拳をグッと握ってこらえる。

「儂の客人になんぞあるか」

「は？　あ、いえ…」

動揺する男に、左門は面倒そうにひらひらと手を振る。

「とにかく、今夜は下がれ。明日の夕方まで待っても戻らなければ、探索の願いを出そうぞ。どこぞで男と逢い引きでもしておるのなら、騒ぎ立てては帰りづらくなるであらうからの」

「な、何をおっしゃいます。奥方様に限ってそのような　　」

「聞こえなんだか？　下がれ」

ピシヤリと言われ、男は渋々と去っていく。そして。

「どうやらおぬしの言ったことは正しいようだ。さて、どうしたもののかの」

「行方知れずになったと知れば、あなたが喜んで届けを出すと奥方は踏んだのでしょうか」

「おぬしのお話を聞く前ならそうしたのであるうな。しかしおそらく……“奥方行方知れず”を公にしたときが、奴らが動き出す機なのであろう」

左門はしばし考え込むと、何かに思い至ったようにニヤリとした。立ち上がり、新之助に告げる。

「明日の夜、また来い。おぬしの知りたい答えがわかるだろうよ」

「どういうことだ？」

「あやつの企み、読めた」

「！そいつは……」

とにかく明日だ、と追い払われ、新之助は仕方なくたけやに戻る。みつを思えばできるだけ早く片を付けたかったが、しかし、中途半端なことをしては片付くものも片付かない。みつに危害は加えられないだろう、という竹次の読みを信じるしかない。

……今夜、みつは大丈夫だろうか。今ごろ泣いてやしないだろうか。

新之助の胸は、たまらなく痛む。

〓 〓 〓 〓 〓

みつが連れて行かれたのは、一軒の民家だった。一緒にいたのは、新之助を訪ねてきた“百合の花”と、初めて見る若い男。夜なのに町は明るく、見たことのない景觀に、みつはキョロキョロとしてしまふ。

みつは当然、そこが150年後の江戸だということは知らなかった。みつだけではない。企てた張本人 福田左門の妻・りくもまた、ただ異世界としか知らなかったため、少なからず動揺をしていた。もちろん、おくびにも出しはしなかったが。

みつは、しかし怖い、とは思わなかった。若い男がそつと「無事にお返ししますから」と囁いてくれたし、家主の老夫婦はとてもいい人たちだった。男との再会を喜び、みつたちを「姉と妹」だとした見え透いた説明も、疑わないほどに。

用意された布団に寝転がり、天井をじっと見る。みつが気になってるのはそこではなかった。

初めてではない、と、思う。ひずみに落ちる瞬間の、あのぐらりと来る感じを、遙か昔に経験したことがあるような気がする。けれどそこでたどり着いた先はまったく記憶になくて。

（ここは、どこなんだろう）

前にも来たことがあるのだろうか。思い出せない。ただ　いつか迷子になったことは覚えていて。お父つつあんがひどく心配していて、そして　。

目を閉じる。

お父つつあんは心配してやしないかしら。

新さんは、怒ってやしないかしら。

よくわからないけれど、あたしはきつと騙されていて、それで新さんのジャマをして、あんな目に遭わせて。馬鹿だ、あたし。怒ってるかしら、新さん……愛想尽かされたかしら。

胸が、ギュツと痛い。

＝　＝　＝　＝

翌日。夜まで何もせずにいらなかった新之助は、勘右衛門を訪ねていた。左門とのやりとりを説明する。もちろん、みつのことは伏せたままだ。時のひずみのことは、最後まで明かさずにいたい。

話を聞いた勘右衛門は、自分も福田の屋敷に出向くと言ってくれた。福田家から、内儀の行方知れずの届けを受け取り次第、駆けつけてくれるという。

何が起こるかはわからない。しかし、何かあったときには自分の身を守らねば。新之助の他に、みつを迎えに行つてやれる者はいないのだ。

そして、夕方になつても戻らぬ妻を、ついに左門は役人に届け出た。探索が始まる。しかし夜通し待機するわけではない。夜更けには灯りが消え、屋敷の主人は寝静まった。

カタリ、と、よほど耳を澄まさなければ聞こえないほどの音がして、天井裏から人影が降りる。左門の寝ている布団に近づき、胸のあたりをしのばせていた凶器でひと息に突く　　が。

「
」

想像していたのとは違う感触に、布団をめくる。そこにいるのが布切れを丸めた人形だと気づく寸前、背後からピタリと刃物を当てられた。

「動くな」

同時に部屋の戸がスパンと開き、勘右衛門が手下を従えて新之助と共に乗り込む。侵入者に刀を突きつけていたのは、屋敷の主・左門だ。

「誰の指図だ？」

「……」

「まあ聞かずともわかるが」

刀が背から首筋に移る。

「…雇われた。首謀者は知らぬ」

フン、と鼻で笑うと、刀はそのままに、今度は勘右衛門に声をかけた。

「あとは預ける。調べれば必ずりくにつながるはずだ。直接の指図は松田であろっ」

勘右衛門は侵入者を引き取り、縄をかける。それを引っ立てながら、

「念のため、数名を残して置きます。ご用心を」

「あの女にしては考えたが、所詮、浅知恵だ。何重にもは仕掛けておるまい」

勘右衛門を見送り、新之助は改めて左門に問う。

「つまり 奥方のねらいはアンタの命だったと？」

フン、と再び嘲笑をもらす。

「夫が殺されようと、神隠しの最中では疑いはかからぬからな。そのために己の身を隠したのであるうよ。数日後に記憶でも無くして戻れば、悲劇の妻の出来上がりというわけだ」

「冗談じゃねえ。やっぱりただの悪質な夫婦げんかじゃねえか。そんなもんには他人巻き込みやがって」

女の企みが潰れたのであれば、迷うことはない。すぐにみつを迎えに行かねば。しかし、踵を返した新之助を左門は呼び止めた。

「まあ待て。どこへ行く？」

「聞くまでもねえ。迎えに行くんだよ。アンタの嫁が俺の妹分を無理やり連れてったんだ」

ふり返りもせず吐き捨てる新之助の背中に、一筋の違和感。……？

ゆっくりふり向くと、薄い笑みを浮かべた左門が刀を掲げていて。その刃には、赤い血。

「行かせぬわ。どこに隠したか知らぬが、このままあの女を戻すでない」

刀が振り下ろされる。咄嗟にかわす。

「…ッ！」

無理な体勢を取った瞬間、背中に激痛が走り、斬られたのだと気づく。左門の攻撃は容赦なく続き、新之助は外へ飛び出す。傷をかばう余裕はなかった。

今倒れるわけにはいかない。ただその一心で裏口から逃げ出すと、勘右衛門が見張りにと残していった手下がギョッとして近寄ってくる。

「おい、あんた…！」

「勘さんに、引田様に伝えてくれ。左門に斬られた。俺はあの女のところへ行く」

返事も聞かずに駆け出し、じゃまをされないとこまで行くと、荒い息を整える間もなく、手をかざし、ひずみを作った。

みつのところへ！

泣くもんか

夢を、見ていた。

緊張と戸惑いで眠れなかった昨晚とは打って変わって、みつは今夜、床につくやいなや眠りに落ちていた。この家の老夫婦は本当にいい人たちで、家事やなんかを手伝っているうちに、打ち解けて緊張がほどけて。ぐっすり寝てしまったのだ。そして、夢を見た。

迷子になって泣いていて、迎えを待ちながら寝てしまつて。遠くで自分を呼ぶ声がした。

みつ、おみっちゃん、みつー

ひとつはお父つつぁんの声。もうひとつは誰だろう？

気がついたら父親に抱き上げられていた。寝ぼけ眼で父の肩越しに見たのは、真っ赤な目をして涙をこらえている少年。

泣かないで。

そんなつもりで、にっこり笑ってみせた。だって、こうするとお父

つつあんはいつつも笑ってくれる。けれどその少年は、びっくりしたような顔になった。おかしいな、笑ってくれないのかな。そんなことを思いながら、再び眠りについたのだ。

みつ、おみつ、どこだ、みつ

そう、あのときと同じ。けど、今度は知っている。あたしはこの声を知っている。

「おみつ！」

ハッと目が覚めた。覗き込んできた顔は、

「新さん……」

まだ半分夢心地だったみつは、反射的に笑みを浮かべた。目が覚めてすぐに好きな人の顔があつたら、そりゃあうれしくなつて当然なもの。けれどその人は、やっぱり笑い返すより先に、びっくりした顔をしてみせたのだった。

「怯えて泣いてるかと思つたら……」

「ちっとも怖くなんかなかったわ。だって、また新さんが迎えに来

てくれるってわかってたもの」

布団から身を起こすと、苦笑しながら新之助がそっと抱きしめてくれた。

「よかった、無事で…。また、ってお前、ひよっとして覚えてたのか…？」

「思い出したの。あのとき迎えに来てくれたのは、新さんだったのね」

新之助の背中に腕を回す。と、そこがぐっしりと濡れていることに気がついた。汗？ 暗くてよく見えないけれど、なんだか額にも胸にも汗をかいているみたいだ。けれどなんだか 独特のにおい。これって。

「……血？ 血が出てるの？」

「さ、帰るぞ」

息が荒い。

「新さん背中どうしたの？ そんな、動いて大丈夫なの？」

「ちつと肩貸してくんねえか。なに、大丈夫だ。お前を連れて帰るまではくたばらねえよ」

そのとき。

「お前…何をしておる！」

声を聞きつけ、りくが起きてきた。

「残念だったな…アンタの企みは、すべて、失敗だ。俺は、こいつ、を迎えに来た。アンタも帰りたいや、ついて来い」

息を切らせながらそこまで言つと、みつの肩を借りながら、宙に手をかざす。

「待て。失敗だと？ どういうことだ」

「…ハア。あつちに戻りゃ、わかることだ。ついて、こようが来るまいが、好きにしな」

振り向きもしない新之助に、りくが焦りを見せる。

「な、何を…。利吉！ あやつを止めい！」

しかし、利吉と呼ばれた男 この家を案内した若い男は、静かに首を振った。

「私はしばらくこちらにおります」

その言葉に、りくが目を見開く。

「なんだと!？」

「よくしてくださったご夫妻を騙すような真似をして……心苦しく
てなりませんでした。男手の必要な仕事を少し手伝ってまいります」

それを聞き、新之助がニヤリと答える。

「帰りたくなったら八のじいさんのところへ行きな」

「はい。そういたします」

そしてみつを連れ、ひずみをくぐる。

「待て！　このようなわけのわからない所に私を置いていくな！」

記憶はそこまでだ。ひずみをくぐった先がたけやの店先であり、竹次と勘右衛門の顔を確かめたところまではぼんやりと覚えている。

しかし、みつを竹次に託したところで意識を失ったものだから、泣き叫ぶみつの声も、半狂乱になったりくが追ってきたことも、新之助は知らなかった。

|| || || || ||

泣くもんか。ぜったい泣いちゃだめだ。

みつはそればかりを頭の中でくり返していた。新之助は竹次の家に運ばれ、医師の診察を受けた。幸い傷は浅く、安静にしていれば後遺症は残らないだろうという。痛みに寝苦しそうな新之助を少しでも楽にしてあげたくて、けれどただただ、額に乗せた手ぬぐいを冷やすことしかできない。

ケガをした本人がいちばん不安なんだから、あたしが泣いたりしちやだめ。

心配も不安もすべて閉じ込めて、ただ泣くまいとする気持ちだけが、

みつを支えていた。だから、新之助が目を覚ましたとき、ちゃんと笑えたのだ。

「…おみつ……？」

「大丈夫よ、新さん。なんにも心配いらないわ」

「お前……」

「なあに？」

「年頃の…娘が、男の部屋に、来るなって言っただろ」

…よかった。軽口を叩けるようなら安心だ。ホッとして気がゆるんだら、泣きそうになる。せつかくこらえてたんだから、もう少しがまん。

「ここ、お父つつぁんの部屋よ。新さんみたいな図体の大きな人、二階へは運べないもん」

薄く笑みを浮かべ、新之助は再び目を閉じる。眠ったかな、と思い、手ぬぐいを浸す水を取り替えようと立ち上がる。すると、

「ありがとつな…おみつの笑ってんのを見たらホッとしたよ……」

「……！」

桶を手にも、あわてて部屋を出る。せつかく、せつかくがまんしてたのに。泣かないって決めてたのに！

廊下で涙を拭っていると、勘右衛門がやってきた。

「お役人さま」

「新の様子はどうだ？」

「今少し目を覚ましました。傷はつらそうですけど、意識はしっかりしてるみたいで」

「そうか。ちょっと新と話をしてもいいかな」

どうぞ、と外へ出て行くみつと入れ替わり、勘右衛門は新之助のやすむ部屋へ入る。しかしすでに新之助はまどろみの中だった。

「よう、気分はどうだ？」

…どつって…痛いよ。

「お前、時間をくぐって来たんだな」

知ってたのか…？

「どうしてそれを言わない？ 教えてくれてりゃあ、もう少し助けられたかもしれないんだ」

それは、どういう…？

「まあいい。今は休め。目が覚めたら説明するよ。ただ、な。これは覚えておけ。お前は一人じゃないってことさ」

その意味を考える間もなく、再び眠りに落ちたのだった。

ほおずきに、

「…新を、奉行所に？」

夜更けのたけや。新之助の付き添いをみつにまかせ、竹次は勘右衛門に「話がある」と切り出されていた。

「正確には、私の個人的な預かりとなりますが」

「どうということだ？」

「竹次先生はご存じなのでしょう？ 新之助が特殊な力を持っていることを」

勘右衛門は竹次を「先生」と呼ぶ。かつて道場で竹次に剣術を学んでいたからだ。二人が会うのは15年ぶり近い。

「お前は何を知ってる？」

「さっき新のやつ、何もない宙のひずみから出てきたでしょう。あれは、時間を超えて来たんじゃないですか？」

「…百年以上先、らしい」

やはり、とつぶやく勘右衛門に、竹次は再び問う。なぜ知っているのか、と。

「…その力を持っているのは新之助だけではないんです」

「なに…？」

「初めてそれを知ったのは、私の甥の身に起きたときでした」

「甥…？ 新が道場で教えてるっていう？」

うなずいて、一度酒を口に運ぶ。そして、勘右衛門は語り出した。

「しょっちゅう神隠しに遭うんだと思っていました。いつの間にか消えて、いつの間にか戻っている。それが、自分の意志で行ったり来たりしてんだってことに気づいたのは、あいつが八つのときでした」

それが原因で「気味が悪い」と勘当されてしまった甥を、勘右衛門が手元に引き取ったのだという。

「その力をうまく使えば、本当に神隠しに遭った人たちを、あいつが助けてやれるんじゃないかと思ったんです。元服したら俺の仕事を手伝わせようかと考えてたんですがね。そうのんびりもしていられなくなりました」

「というと…?」

「どうやら同じような力を持つものが稀にいるらしい。そしてそういったら、力を悪用しているらしいことがわかったんです。あるところか、罪人を逃がしたり、意図的に人を神隠しに遭わせたりする。そんな生業のやつらがいたんですよ」

「なんてこった…」

「それで私は、時間のひずみを超える能力を持つ者を探し始めました。奉行所の配下に置いて、その力を世のために使わせたいのがひとつ。もうひとつは、そういった阿漕なやつらに利用されないよう、保護したいというのも理由でした」

竹次がずっと懸念してきたのも、新之助のその力が悪用されないかということだった。今回、恐れていたことが起きてしまった、と思っていた。しかし、組織的に悪事を働いているようなところへ連れて行かれ、無理矢理協力させられ続ける、などということもあり得るということだ。それは竹次が抱いていた懸念の比ではない。

「あいつを…新を守ってくれるか」

「そのつもりです。今のところ、甥を含めて三人見つけています。ほかに見当をつけている者が一人。新が加われば全部で五人の体制を組める。表立って発表できる組織ではありませんから、奉行所の正式な一員、というわけにはいきませんが。内々に上の承諾は得ています。禄も出る。私の元で普段は奉行所の仕事を手伝いながら、

依頼があれば行方不明者の探索をする　　どうです？　先生から新を説得していただけませんか」

「そいつぁ…そりゃあ願ってもない話だ。俺はずっと、新にあんな商売は止めさせたかった。しかし新は、自分が止めてしまったら神隠しに遭った人たちはどうなるかと、手の引き時を見失ってたんだ。それが、お役人としてその力を生かすことができるのであれば、こんなありがたいことはねえ…新に、その話をしてやってくん。俺が説得するまでもない」

勘右衛門はようやく緊張の表情をほどこした。途端にこの男独特の軽い空気をまとい直す。

「私が長々と説明するより、先生がひとこと言ってくだされば早いですかね」

「…何と？」

「浪人者のところへ嫁にやる気はねえ、とね」

竹次はため息をつき、酒をあおった。

「あいつら…やっぱりそうなるかねえ」

「そうなるでしょう」

「新は…お武家だ。どのみち、みつが嫁に行ける先じゃねえよ」

「なんの。前例ならお父上がお持ちでしょう」

「お前…それを」

「惚れた娘の家業を継ぐために、十手を包丁に持ち替えた男。今でも伝説ですよ」

チツ、と舌打ちが返る。

「…新が起き上がれるようになったら話すよ。お前も時間が合えば来てやってくれ。みつのことは、俺がどうこうする話じゃねえ。二人が考えりゃいいことだ」

勘右衛門がニヤリとし、あとは静かに酒を酌み交わす。口数の少ない竹次を相手に、ぼつりぼつりと語る勘右衛門の声が、この夜のたけやに遅くまで続いた。

みつは、まだ知らなかった。目の前にある、この男の寝顔を見られるのは今だけだと思っていたから、焼きつけるのに必死だった。

初めて好きになった人。初恋の相手のこの人は、そう遠くないうちに、元いた場所へ戻ってしまうだろう。そこがどこなのかすらわか

らないみつにとっては、もう手の届かない人になってしまう。

看病という名を借りてそばにいられるこの時間を、ありがたく思っ
てしまうのは、痛みに苦しむ新之助に申し訳ないのだけれど。

〓 〓 〓 〓

新之助の回復は早かった。数日後には起き上がれるようになり、体
力回復のためにと、みつを付き添いに近所を歩けるようになるまで
は、そう時間はかからなかった。

奉行所の仕事につかないかという話は、早い段階で聞いていた。是
非もない。即座に膝をそろえ、手を突いて頭を下げていた。ただ、
みつにはまだ、話していない。それは新之助に任せると、竹次に言
われている。

他愛もない話をしながら、ゆっくりと歩く。最近の日課を、新之助
は気に入っていた。早く回復させて仕事につきたいと焦る新之助に、
みつとの時間はやさしく肩をたたく。今はもう少し、ゆっくりすれ
ばいい、と。

「新さん、ほらあそこ。猫が寝てる。あのドラッとしたところなんか
新さんそっくりね」

「バカ言え。ここいらのメス猫は大概あいつのお手つきだぜ？　俺はそんなに見境無くねえよ。相手はきっちり選ぶ」

みつを小突けば、バカばっかし、と腕をはたかれる。みつは相変わらずの減らず口だったが、以前のようにきゅんきゅんと突っかかって来ることはなくなった。

あの日。刀で斬られた痛みに朦朧とする中で見た、みつの顔。「大丈夫、なんにも心配いらない」と、新之助に向かって微笑んでみせたみつの顔に。新之助ははつきりと自覚した。

ああ、こいつはもう“妹”なんかじゃない。

あの日から、新之助にとってみつは一人の女になった。ただ守りたいばかりではなく、自分もまた、彼女に包まれる。

「どうせあたしは、“百合の花”じゃないわよ」

どこからどうつながったのか、そんなことを言っただけ唇を尖らせるみつに、新之助は苦笑する。すべてが解決した今もなお、新之助が妖艶な女性と二人きりで過ごした時間にやきもちを焼いているらしい。

「そうだなあ。おみつは百合ではないわなあ」

また怒り出すかと思いきや、目をくるりと回して新之助を覗き込んでくる。

「ね、じゃああたしはどんな花？」

「だから俺ア花の名前なんざ知らないって…」

花の名で知っているものなんて、せいぜい桜に紫陽花、たんぽぽくらいのものだ。

「……ああ、たんぽぽか」

「たんぽぽ！？」

みつは、がっかりしたような複雑な顔になるが、構わず続けた。

「あれはお日さんの色してるしなあ。よく見りゃどってことねえが、一番に見つけると、ああ春が来たかとうれしくなる　ま、食って食えないこともなし。実用性もあつて、あれで大した力持ってたんだぜ」

散々な言い方だが、みつは頬がゆるむのを抑えられない。

「たんぽぽ……」

かみしめるようにつぶやくみつを見る新之助の目が、とても優しいことにみつは気づいていない。

「ああ、もつと似てるのがあったな」

「え、なあに？」

新之助が指さす先には、縁台に置かれた鉢植え。

「……ほおずき？」

「すぐ真っ赤になってふくれるところなんざ、そっくりだ」

「なっ……！」

「そら、ふくれた」

笑ってみつの頬をつつく。もう知らない！と、みつはスタスタと先を行ってしまふ。それまでは、新之助の体を気遣ってゆっくり歩いてくれていたのだ。

「みつ」

「何よッ」

「傷がよくなったら、俺はたけやを出る」

みつの足が止まる。

「……そう」

「勘さんの下につくことになったんだ。しばらくは見習いだ」

「あの、お役人さま？」

職につけるのだから、おめでとうございます、と言わなくてはいけないのだろっけれど。なかなか喉から出てこない。

「しばらくは、親父の飯も食えなくなるな……みつ」

みつは何も言えず、ただ見返すだけで精いっぱい。

「お前さんの亭主になるにや、包丁は使えなくてもいいんだっとな

「？」

「……………」

ぽろりと落ちた涙を拭つてやると、そのままみつの頬に手を添える。きれいな涙だ、と思った。次から次と止まらないことには困ったけれど。

「あたしは…」

いつもみつの頭を撫でていたその手が頬に置かれ、思っていたよりも大きな手であることにみつは気づく。

「あたしは、たけやをずっと手伝えたらそれでいいの…」

けど。いつか、たけやよりも、父親よりも、大切に思う人に出会うような気もしていた。

「そうか…」

頬に手を添えたまま、親指が頬で遊ぶ。その肌触りを楽しみながら、しかし、と新之助は思案する。

うまく行つて、このまま役人の身分になれたとして。その内儀が食堂の手伝いというのはマズいだろうか。いや、実家の父親を助けるためといえは問題ないだろうか。新之助が早くもそんな心配をしていることを、みつは知らない。ただただ、真つ赤になつて新之助を見上げるだけ。

みつは知らない。あと数年のうちに、その夢が叶うことを。

新之助が出て行つてしまつたら、かわりにほおずきの鉢を買つてこようかな、などとぼんやり考える。その唇に、もうすぐ新之助の唇が重なることも。みつはまだ知らなかった。

これから、みつの毎日は小気味よく続いていくに違いない。

ほおずきに、（後書き）

おしまいです。お読みくださってありがとうございました。
最後のほおずきのくだりを書くためだけに作ったような話でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6083t/>

ほおずき、ぱん

2011年8月7日23時44分発行